「バビロンを倒される【主】」イザヤ書 14 章 1－23 節

2023.3.12　礼拝

序論）

今日の箇所は、前回に引き続きバビロンに対する裁きの預言となっています。とはいっても、前回の 13 章の預言は神様がバビロンをどのように滅ぼされるかという預言でしたが、今回の 14 章の預言は、その滅ぼされたバビロンは滅ぼされた後どうなるか。というところに強調点がある預言となっています。

14 章のバビロン預言の概要）

①イスラエルにとっては救いの再開であった。

神様は、バビロンが滅びるという預言を、イザヤを通して語られますが、バビロンが滅ぼされるということは、イスラエルにとっては【主】の選びがもう一度なされ、あの出エジプトの出来事のように、イスラエルをもう一度約束の地に導き、そこで平安を与えてくださるということを意味しています。

これはイスラエルが何か特別に素晴らしかったということではなくって、【主】があわれみによって彼らを選んでくださったからです。そして、**１節を読むと「寄留者も彼らに連なり、ヤコブの家に加わる。」とありますから、**イスラエルだけじゃなくって、イスラエルと同じ信仰を持ち、まことの神様に従おうとする外国人も、神様が救い出してくださるイスラエルの中に加えてくださるのです。

これはイスラエルにとっては、彼らの痛みと彼らが受け取るべき怒りからの解放を意味しています。もともと、イスラエルがなぜバビロンにとらわれていたかというと、彼らが【主】の前に罪を犯して、【主】の怒りを買っていたからです。

でも、神様はあわれみによって、彼らを解放し、その怒りからも解放してくださるのです。

②バビロンの破滅を喜ぶ者たち。（バビロンの罪）

さて、一方、滅ぼされる側のバビロンについてですが、彼らはなぜ【主】によって支配する力を折られ、滅びなければいけなかったのでしょうか。６節を読むと、

14:6 彼は激怒して諸国の民を討ち、絶え間なく彼らを討ち、怒って国々を容赦なく虐げて支配したものだったが。

とあります。バビロンはイスラエルだけではなく、諸国を容赦なく虐げる。そのような罪を犯していたのです。しかも、ここに「激怒して」とか「怒って」とある通

り、必要に迫られて侵略したというよりは、彼らの感情のまま、思うままに諸国を滅ぼしていったのです。だから、このバビロンが打たれたとき、**7節にあるように**全地は安らかに憩い、喜びの歌声をあげたのです。

当然ですよね。自分をいじめる存在、滅ぼす存在がいなくなったから、そのことを諸国は喜ぶのです。でも、このバビロンの破滅を喜んだのは諸外国だけではありませんでした。8節をみると

14:8 もみの木もレバノンの杉も、おまえのことを喜ぶ。『おまえが倒れ伏したときから、もう私たちを切り倒す者は上って来ない。』

とあります。つまり、バビロンは諸国を滅ぼすだけではなくって、もみの木とか、レバノン杉とか、そのような自然をも感情のままに切り倒して、滅ぼしていったのです。だから、このバビロンの破滅はもみの木などの自然にとっての喜びでもありました。

③霊的にも滅ぼされるバビロン

そして、バビロンに与えられた滅びというのは、この世の中の物質的な滅びだけでなく、霊的な滅びも含まれていることが9-11節の部分を読めばわかります。

14:9 よみは、下界でおまえが来るのを迎えようとざわめき、死者の霊たち、地のすべての指導者たちを揺り起こし、国々のすべての王をその王座から立ち上がらせる。
14:10 彼らはみな、おまえに告げる。『おまえもまた、私たちのように弱くされ、私たちに似た者になった。』
14:11 おまえの誇り、おまえの琴の音はよみに落とされ、おまえの下には、うじ虫が敷かれ、虫けらがおまえの覆いとなる。

この世にはバビロン以外にも色々な支配者たちがいました。まことの神様に従うことなくこの世を支配していた者たちは、よみの世界。つまり地獄ですね。その地獄でこの世の栄光をすべて奪われて、滅ぼされ続ける状態になっていたのです。そして、そこにいる元王たちがバビロンに向かって「おまえもまた、私たちのように弱くされ、私たちに似た者になった。」といっています。

バビロンはこの世のあらゆる国々を滅ぼし、自然を滅ぼしていった絶対的な支配者でしたけども。その栄光はすべて奪われ、霊的な世界においても、よみに落とされ、蛆虫の上に寝ることになり。虫けらを布団とするような最も低い者へと落とさ

れたのです。
　みなさん、なぜ、バビロンはこのように霊的にも滅ぼされる存在になったのでしょうか。それは彼が霊的にも大きな罪を犯していたからです。

④神になりかわろうとするバビロン
　12-14 節を一緒に読んでみましょう。

14:12 明けの明星、暁の子よ。どうしておまえは天から落ちたのか。国々を打ち破った者よ。どうしておまえは地に切り倒されたのか。
14:13 おまえは心の中で言った。『私は天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山で座に着こう。
14:14 密雲の頂に上り、いと高き方のようになろう。』

実際は、もとのヘブル語聖書を読むと、この明けの明星と言われる存在のセリフには、「私」という言葉が繰り返し語られています。どのようになっているかというと。明けの明星は、『私は天に上ろう。私は神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山で私は座に着こう。14:14 私は密雲の頂に上り、私はいと高き方のようになろう。』っとこのように言っていたのです。
　「自分こそが、神の星々よりもはるか上の王座に座るのだ。」神の星々というのは天使たちのことです。「天使たちよりもずっと上の王座にすわるのだ。」といっており、「北の果てにある会合の山で私は座に着こう」というのは、当時、あのバビロン地域の神話では、神々は北の果ての山にあつまって会合を開くという神話が会って、バビロンはその神々の集会の中の王座につく。つまり、『【主】の【主】、王の王になるのだ。』といっており、密雲というのは神様の栄光をあらわしますが、バビロンは「その神の栄光のいただきの上にのぼり、いと高き方のようになる。」といっています。つまり、自分が神に、【主】になりかわるのだ。と言っているのです。
　これこそ、明けの明星といわれるバビロンが犯している最も罪深い霊的な罪です。だから、彼はこの世において滅びるだけでなく、霊的な世界、よみと呼ばれる地獄に落とされて滅ぼされるのです。

⑤埋葬さえされない
　そして、そのバビロンの亡骸、死体を見た人たちは、そのあまりの惨めさ故に、**『この者が、地を震えさせ、王国を震え上がらせ、世界を荒野のようにし、町々を壊し、捕虜たちを家に帰さなかった者なのか。』（16-17）**という驚きの声をあげます。

なんで、こんな驚きの声をあげるかというと、圧倒的な力で世界を支配していたバビロンは、この世の他の王たちのようには葬られないからです。
普通、歴史の中の王様というのはすごいお墓を作られたりします。エジプトのピラミッドもそうですし、日本の古墳もそうです。中国の始皇帝のお墓は、70 万人の労働力と 40 年という歳月をかけて作られたそうです。普通、王様というのはそのように葬られます。でも、バビロンはどのように葬られるかというと、19 節

14:19 しかしおまえは、忌み嫌われる枝のように、墓の外に投げ捨てられる。剣で刺し殺された者たちで、おまえはおおわれ、屍のように、墓穴に下る者たちに踏みつけられる。

つまり、墓の外に捨てられて、他の死者たちにふみつけられるような、そのような扱い方をされるのだということです。
みなさん、肉体も滅んで、霊的にも滅んで、死体さえも大切に扱われない。これほど悲惨なことは他にあるでしょうか。なぜ、バビロンが徹底的にこのように扱われるかというと、彼は諸国を滅ぼし、自然を滅ぼすだけではなくって、自分の地、自分の国民さえも虐殺していたのです。20 節の前半に明確に書かれています。

14:20a おまえは墓の中で彼らとともになることはない。自分の地を滅ぼし、自分の民を虐殺したからだ。

このようにバビロンは、あらゆる者を滅ぼしていったのです。諸国も、自然も、自分の国の民も・・・・。だから、神様の裁きは、バビロンをこのように滅ぼすにとどまらず、21 節から 23 節のように言われています。

14:21 彼の子らのために屠り場を備えよ。先祖の咎のためだ。彼らが立って地を占領し、世界の面を町々で満たさないように。」
14:22 「わたしは彼らに向かって立ち上がる。――万軍の【主】のことば――わたしはバビロンから、その名も、残った者も、子孫も末裔も絶ち滅ぼす。――【主】のことば――
14:23 わたしはこれを針ねずみの領地、水のある沢とし、滅びのほうきで一掃する。――万軍の【主】のことば。」

つまり、神様はバビロンを滅ぼすだけじゃなくって、バビロンに属していたバビロ

ンの子たちも全て徹底的に立ち滅ぼすといわれているのです。なぜでしょうか？
このバビロンのようにあらゆるものを滅ぼす性質が、バビロンが滅びた後も続くことがないためです。だから、【主】はバビロンだけではなくって、バビロンの子どもたちをも滅ぼし尽くすと言われています。

３）バビロンとは誰か？

これが今日の箇所、イザヤ 14 章の 1－23 節の全体的なあらましです。

バビロンは、諸国も、自然も、自分の国民さえも滅ぼす存在であり、そのバビロンを神様は、この世的にも、霊的にも、死体も、そして、子孫も徹底的に滅ぼすと預言されました。

問題はこのバビロンとは何者なのか？ということです。みなさん、このバビロンについての預言は歴史的に存在していたバビロンについての預言ではありません。なぜならば、例えば 2 節でイスラエルの家は「自分たちを捕らえた者を捕らわれ人にし、自分たちを追い立てた者を支配するようになる。」といわれていますけども、歴史上のバビロンが滅んだときに、バビロンに捕らえられていたイスラエルがすぐに解放されたかというと、そうではなくってペルシャに支配されました。だから、当然、イスラエルがバビロンを支配仕返すということはありませんでした。つまり、歴史的な流れにおいてはこの預言の通りになっていないのです。だからこそ、この預言は歴史上のバビロンのことではないことがわかります。

では、このバビロンとは何者なのかというと、ヨハネの黙示録で大淫婦といわれるバビロン、私達に罪を犯させるための誘惑をするバビロン。【主】に逆らうサタンの象徴であるバビロンのことを指しています。

ただ、12 節でかたられる「明けの明星」は、バビロンではなくって、ルシファーという天から落ちた元天使、バビロンを霊的に支配していた存在をさしている。という解釈をする人が、歴史的には多くいます。現代の福音派の中でも、12 節の「明けの明星」というのはルシファーのことだと、理解する人も結構います。

なぜかというとこの「明けの明星」という部分のヘブル語を、ラテン語に訳すと「ルシファー」「光を運ぶ者」という訳になるからです。そして、この明けの明星は、さっきも言いましたけども、「神の星々のはるか上に私の王座を上げ」と言っています。つまり、天使たちのトップに立つと言っている。だから、明けの明星であるルシファーは、天使たちのリーダーである天使長であって、その天使長が神に成り代わろうとして、天から落ちて悪魔になったのだ。っと、まぁ、そうゆう話がまことしやかに語られていますけども、私はそこまでこの箇所から言い切ることはできないのではないかなと思います。

ただ、この明けの明星と言われる存在は、文脈的にはバビロンのことです。聖書全体の構成としては、黙示録で大淫婦と呼ばれる。【主】に敵対して人に罪を犯させる代表的な存在に当てはまりますから、ルシファーといわなくても、神様に逆らうサタンを表していると理解してもよいと思います。

神様は、この私達に罪を犯させるサタンも、霊肉共に滅ぼし、その死体さえも滅ぼし尽くし、そして、このバビロンの子と呼ばれるものたちをも滅ぼし尽くすといわれているのです。

適用）

では、この今日のみことばは私達にどのように当てはまるのでしょうか。

一つは、私達に罪を犯させる力が、どれほど強大に見えたとしても、私達をヤコブの家に加えてくださった【主】なる神様は、この霊的バビロンを徹底的に滅ぼしてくださるので、私達はこれを恐れる必要はないということです。

私たちは、罪を犯して当たり前、サタンに支配されて当たり前、バビロンに誘惑されて当たり前と思いこんでいるところがありますけども、私達が信じている【主】なる神様は、そのバビロンの支配の王笏をおることができる方であり、バビロンを徹底的に討ち滅ぼすことできるお方なのです。

そうであるのならば、バビロンと【主】の力を比べたら、どっちの力が強いのでしょうか。【主】ですよね。　だから、私達はバビロンの支配、サタンの支配を恐れなくて良いのです。

恐れないばかりか、バビロンに虐げられていた全地が喜びの歌声をあげたように、もみの木やレバノン杉が喜んだように、私達も　この【主】の勝利を信じて喜べるのです。そして、バビロンの滅ぼされたとき、イスラエルに何が与えられると約束されていたかというと、「憩いの日」が与えられると言われています。つまり、安息が与えられるのです。

私達は【主】の勝利によって、一切の恐れや不安を持たなくて良い憩い。完全な安息が与えられるのです。だからこそ、私達はどのような霊的な戦いの中にあったとしても、喜んで【主】のときを持ちたいと思います。

そして、今日のみことばをもう一つ自分たちに当てはめて考えてみたいと思います。【主】に滅ぼされるバビロンは、諸国を滅ぼし、自然を滅ぼし、自分の国の民さ

えも滅ぼしました。私達はどうでしょうか。自分の周りの人たちを恐れさせ、虐げてはいないでしょうか。また、この世の自然を自分勝手に滅ぼしてはいないでしょうか。自分に委ねられた民、家族であったり、職場の部下であったり、そうゆう人たちを滅ぼしてはいないでしょうか。

もし、私達がこのバビロンがやっていることと、同じようなことをやっているのならば、私達は神の民として生きているのではなくって、バビロンの民として生きている事になってしまいます。

自分の歩みを振り返って、バビロンのようにならないように、寧ろ、【主】を愛し、世界を愛し、隣人を愛するように努めて行きましょう。それが今日のみことばに私達が応答できることだと思います。